

## エマルのアッカド語における格標示

池田 潤

## 1. はじめに

アッカド語は紀元前3千年期中葉から紀元7世紀までの3千年以上に渡ってメソポタミアで使われた東セム語で、紀元前二千年期にはメソポタミア本土だけでなく東はエラムから西はエジプト・ヒッタイトに至る古代オリエント世界の共通語の役割を果たした。本稿では、メソポタミア以外でアッカド語を母語としない者が使ったアッカド語を総称して「辺境のアッカド語」(Peripheral Akkadian、以下「PA」と略)と呼んでメソポタミア本土のアッカド語(Core Akkadian、以下「CA」と略)と区別することにする。エマルはユーフラテス河中流域に位置する古代都市(Emar、現在の Meskene-Qadime)で、そこで書かれたアッカド語はPAに属する[注1]。

CAの格標示は対格型である。したがって、他動詞の主語は自動詞の主語と同じ語尾で標示され、他動詞の目的語と区別される。そのほかに名詞・前置詞にかかる名詞を標示する属格がある。CAの格語尾を簡単にまとめると表1ようになる。なお、表中の「:」は母音の長さを表し、「<sup>m</sup>」と「<sup>n</sup>」は古い方言にしか現れない語尾である。

	男性単数	男性複数	男性双数	女性単数	女性複数	女性双数
主格	+u <sup>m</sup>	+u+: ~ +u: +t+u	+a+: <sup>n</sup>	+t+u <sup>m</sup>	+a: +t+u	+t+a+: <sup>n</sup>
属格	+i <sup>m</sup>	+i+: ~ +u: +t+i	+i+: <sup>n</sup>	+t+i <sup>m</sup>	+a: +t+i	+t+i+: <sup>n</sup>
対格	+a <sup>m</sup>			+t+a <sup>m</sup>		

表1: CAの格語尾一覧

格・性・数の形態素が渾然一体となっているため分かりにくいかもしれないが、太字で表記してある部分が格を標示する形態素である。すなわち、単数では u = 主格、i = 属

格、*a* = 対格、複数では *u* = 主格、*i* = 属格・対格、双数では *a* = 主格、*i* = 属格・対格という体系になっている。名詞の後に接尾代名詞が付くと、*i* 以外の短母音は脱落して + $\emptyset$  (ゼロ形態素) に変化する [注 2]。また、名詞を修飾する形容詞は被修飾語と同じ格で標示される。形容詞に付く格・性・数形態素は +*u/i*+ (名詞用) ~ +*u*:+*t*+*u/i* (形容詞用) 以外は同じである。

PA の格標示は一般に CA の格標示の不完全な発現と見られている [注 3]。PA が第二言語として習得されたものであるためか CA の格標示に合わない例は単なる間違いと見なされているが、PA が CA と異なる格標示体系を発展させる可能性が見落とされているのは残念である。そこで、本稿ではエマルのアッカド語を例にとりて、一見したところ単なる「間違い」に過ぎない現象の背後になんらかの体系性が潜んでいる可能性を検討してみたい。

## 2. 主語の標示

エマルのアッカド語では、下に示すように他動詞の主語も自動詞の主語も常に CA の主格の形態素で標示される。

+*u* — *aḥ*+*u* 「兄弟」 (Emar VI 183:13', 15'; RA 77 1:34, 35; RA 77 1:31), *bīt*+*u* 「家」 (Emar VI 10:19'; 20:6; 141:9; 158:9; 253:29; ASJ 12 8:8; 10:18'), *ḥupš*+*u* 「(社会階級を表す語)」 (Emar VI 17:3), *ḥurād*+*u* 「(兵士の種類を表す語)」 (Emar VI 42:14), *kasp*+*u* 「銀」 (Emar VI 11:29), *libb*+*u* 「心」 (ASJ 10 D 2:18'), *libb*+*u*+*šu* 「彼の心」 (Emar VI 139:36; JCS 40 2:16), *libb*+*u*+*šunu* 「彼らの心」 (Emar VI 9:31; 94:17'; 140:15; 141:17'; 142:15; ASJ 12 8:16; 10:14), *mut*+*u*+*ši* 「彼女の夫」 (RA 77 2:29), *šarr*+*u* 「王」 (ASJ 12 7:34), *tuggur*+*u* 「(家の種類を表す語)」 (Emar VI 138:37; 144:8; 253:29), *ṭupp*+*u* 「粘土板」 (Emar VI 8:42; 10:20; 14:19; 137:161'; 141:23'; 158:29; ASJ 12 7:49), *umm*+*u*+*šunu* 「彼らの母親」 (RA 77 1:24).  
 +*t*+*u* — *bārū*+*t*+*u*+*šu* 「彼の占い」 (ASJ 12 7:33), *erše*+*t*+*u* 「土地」 (Emar VI 14:10', 20'; 94:8'; 95:5'; 137:40', 50'; 159:9; ASJ 12 1:8).  
 +*a*+ — *ḥaff*+*a*+*u*+*šu* 「彼の笏」 (Emar VI 256:5).

+a:+t+u — bīt+a:+t+u 「家」 (*Emar VI* 8:31; 9:23; 139:†29<sup>1</sup>).

+Ø — ašša+ti+Ø+ya 「私の妻」 (*Emar VI* 185:4; *RA* 77 2:6, 18), libba+Ø+šunu 「彼らの心」 (*Emar VI* 126:15; 137:55; 144:21; 146:18; 158:18).

haft+a+:+šu 「彼の笏」は haft+a+šu (単数対格、注 2 参照) と分析することもできるが、その前に数詞の「2」があるため双数であることに疑いの余地はない。また、ašša+ti+Ø+ya 「私の妻」と libba+Ø+šunu 「彼らの心」のゼロ形態素の前の母音は子音連続を避けるために挿入された支えの母音で、文法的意味は持たない〔注 4〕。

主語を修飾する形容詞や代名詞も常に CA の主格の形態素で標示される。

+u — ann+û 「この」 (← anni+u; *Emar VI* 14:20; 159:9; *ASJ* 12 10:8), huk+u 「(パンの種類を表す語)」 (*Emar VI* 20:18), šan+û+ma 「ほかの」 (← šani+u+ma; *Emar VI* 8:42; 10:†20<sup>1</sup>; 137:61; 141:23; 158:29; *ASJ* 12 7:49).

+t+u — annī+t+u 「この」 (*Emar VI* 14:†10<sup>1</sup>; 95:5<sup>1</sup>).

### 3. 名詞・前置詞にかかる語の標示

先行する名詞を修飾する名詞はほとんどの場合 CA の属格形態素で標示される。

+i — aḥ+i+šunu 「彼らの兄弟」 (*ASJ* 12 1:34), bēl+i+šunu 「彼らの主君」 (*Emar VI* 17:7), bīt+i 「家」 (*Emar VI* 20:10; 125:11; 126:10; 141:11; 158:12; 185:18; 253:18; *ASJ* 12 7:13; 8:10), bīt+i+ši 「彼女の家」 (*Emar VI* 156:22), bīt+i+šu 「彼の家」 (*Emar VI* 17:†40<sup>1</sup>; *RA* 77 2:4), ḥurr+i 「(意味不明)」 (*Emar VI* 14:1), kiṣr+i 「分遣隊」 (*Emar VI* 17:8, 18), libb+i+ši 「彼女の心」 (*RA* 77 2:23), pān+i+šu 「その前」 (*Emar VI* 8:5; 9:4; 125:4; 139:†8<sup>1</sup>), šarr+i 「王」 (*Emar VI* 17:5<sup>1</sup>; 138:18).

+t+i — bdlī+t+i 「砂地(?)」 (*Emar VI* 138:1).

+t+i+: — erše+t+i+šu 「彼の土地」 (*Emar VI* 159:12).

+a:+t+i — bīt+a:+t+i 「家」 (*Emar VI* 9:26).

同様のことが前置詞にかかる名詞についても言える。

+i — *ab+i+šunu* 「彼らの父親」 (*Emar VI* 156:4), *aḥ+i* 「兄弟」 (*Emar VI* 183:15<sup>1</sup>;  
*RA* 77 1:31, 34, 35), *aḥ+i+šunu* 「彼らの兄弟」 (*Emar VI* 20:31), *bāb+i* 「門」 (*Emar*  
*VI* 140:1), *bel+i+šu* 「彼の主君」 (*Emar VI* 1:12<sup>1</sup>; 42:5, 18; 144:10<sup>1</sup>; *ASJ* 12 7:10<sup>1</sup>),  
*bel+i+šunu* 「彼らの主君」 (*Emar VI* 17:13), *biqm+i* 「(意味不明)」 (*Emar VI* 2:2),  
*bīt+i* 「家」 (*Emar VI* 20:21), *bīt+i+ya* 「私の家」 (*Emar VI* 185:5<sup>1</sup>, 23<sup>1</sup>), *bīt+i+šu* 「彼  
の家」 (*Emar VI* 10:13<sup>1</sup>), *buḫ+i+šu* 「彼の存命」 (*RA* 77 1:3; 2:3), *būs+i* 「財産」  
(*RA* 77 1:29), *ḫī+i+šu* 「彼の罪」 (*Emar VI* 1:13; 144:12; *ASJ* 12 7:10), *kasp+i* 「銀」  
(*Emar VI* 3:29; 4:17; 146:15; *ASJ* 12 7:15; 16:12), *libb+i* 「(複合前置詞の構成要素)」  
(*Emar VI* 17:2, 21<sup>1</sup>; 156:22; 180:12<sup>1</sup>; *RA* 77 1:14), *libb+i+šu* 「彼の心」 (*RA* 77 1:23),  
[mi]mm+i+ši 「彼女の財産」 (*Emar VI* 253:11), *muḫ+i* 「(複合前置詞の構成要素)」  
(*Emar VI* 14:1; 17:5<sup>1</sup>, 7, 31; 97:12<sup>1</sup>; 137:22; 185:17<sup>1</sup>), *nikār+i* 「他人」 (*Emar VI* 20:13,  
31), *pān+i* 「(複合前置詞の構成要素)」 (*Emar VI* 137:1; 253:18), *pūh+i* 「代わり」  
(*Emar VI* 10:13; 159:12), *pūh+i+šunu* 「それらの代わり」 (*Emar VI* 8:35), *qaṣr+i*  
「(意味不明)」 (*Emar VI* 142:1), *sarār+i* 「よそ者」 (*RA* 77 2:19), *šarr+i* 「王」 (*Emar*  
*VI* 17:4; 142:9; 142:10; *ASJ* 12 7:28, 32; 10:9), *ūm+i* 「日」 (*Emar VI* 180:1; 253:1; 256:  
1, 23; *RA* 77 1:1; 2:1), *umm+i+ši* 「彼女の母親」 (*Emar VI* 180:22), *zibh+i* 「(意味不  
明)」 (*Emar VI* 2:10; 139:15<sup>1</sup>).

+i+: — *uṣṣ+i+:+ši* 「その礎石」 (*Emar VI* 144:2), *uṣṣ+i+:+šu* 「その礎石」 (*Emar VI*  
20:1).

+t+i — *ašša+t+i* 「妻」 (*RA* 77 1:22), *bārū+t+i+šu* 「彼の占い」 (*Emar VI* 42:15), *bāṣt*  
*+t+i+ya* 「私の財産」 (*RA* 77 1:29), *danna+t+i* 「飢饉」 (*Emar VI* 20:29; *ASJ* 12 16:  
14), *erše+t+i+šunu* 「彼らの土地」 (*Emar VI* 159:21), *nukur+t+i* 「戦争」 (*Emar VI*  
20:14 29; 256:10<sup>1</sup>; *ASJ* 12 16:14), *qiṣt+t+i+šu* 「彼の贈り物」 (*ASJ* 12 7:36), *raqqa+t+i*  
「土手(?)」 (*Emar VI* 146:1; *ASJ* 12 7:21<sup>1</sup>), *rebī+t+i* 「広場」 (*Emar VI* 256:9), *šīm+t*  
*+i+š[i]* 「彼女の運命」 (*RA* 77 1:25), *zit+t+i* 「分け前」 (*Emar VI* 253:11<sup>1</sup>).

名詞・前置詞にかかる名詞を修飾する形容詞や代名詞も通常CAの属格形態素で標示される。

+i — anni+i 「この」 (JCS 40 2:10), anni+im 「この」 (Emar VI 97:11<sup>1</sup>; 180:1; 253:1; 256:1, 123; RA 77 1:1; 2:1), gamr+i 「完結した」 (Emar VI 9:29), šarp+i 「精錬された」 (Emar VI 138:10).

しかし、CAの属格形態素が期待される環境でCAの主格形態素が用いられる場合がある。一例をあげると、

ina muḫḫi balī+t+u 「砂地(?)に」 (Emar VI 137:22), ašar PN bēl+u+: X 「PN(=人名)すなわちXの所有者から」 (passim), bēl+u+: erše+t+u 「土地の所有者」 (Emar VI 137:42, 51; cf. 94:10<sup>1</sup>), bitu ša PN1 ašša+t+u ša PN2 mār PN3 「家はPN1、すなわちPN3の息子であるPN2の妻のものであった。」 (Emar VI 20:6-8), ana bīt+u+ya ...ana mim+m+ū+ya ... lizūzū 「私の家と…財産を…分割してもよい。」 (RA 77 1:28-31), aššum erše+t+u 「土地に関して」 (ASJ 12 1:33-34), ana X kasp+u šarp+u 「Xシェケルの精錬された銀で」 (passim), [ina/ana] šat+t+u dannati(?) nu-kūr-ti 「飢饉と戦争の年[に]」 (Emar VI 20:14).

#### 4. 目的語の標示

エマルのアカド語における目的語の標示にはCAの主格・属格・対格の形態素がすべて用いられている。

+a — bīt+a 「家」 (Emar VI 20:15<sup>1</sup>, 24), dīn+am 「裁判」 (Emar VI 14:15, 17), ḫīl+a 「罪」 (ASJ 12 7:9; Emar VI 144:10<sup>1</sup>), ḫīl+am 「罪」 (Emar VI 1:11), kasp+a 「銀」 (passim), kišr+a 「分遣隊」 (Emar VI 17:6, 9, 15), šum+a+šu 「彼の名前」 (ASJ 12 7:48), umm+a+šu 「彼の母親」 (RA 77 1:15).

+i — bīt+i 「家」 (Emar VI 141:15<sup>1</sup>, 20; 158:16, 21<sup>1</sup>; 183:14; RA 77 1:34; ASJ 12 8:14, 19; 10:12<sup>1</sup>, 17), būš+i 「財産」 (RA 77 2:14).

+u — bīt+u 「家」 (Emar VI 10:12, 16; 126:14, 18; 156:1, 4, 7, 13; RA 77 1:32; ASJ 12 7:16, 18, 47), kasp+u 「銀」 (Emar VI 138:44), mim+m+ū+ya 「私の財産」 (RA 77 2:15),

*tuggur+u* 「(家の種類を表す語)」(*Emar VI* 138:43<sup>1</sup>, 45; 144:13, 20<sup>1</sup>, 23<sup>1</sup>).  
*+t+a* — *ašša+t+a* 「妻」(*Emar VI* 185:21<sup>1</sup>), *erše+t+a* 「土地」(*Emar VI* 95:13<sup>1</sup>).  
*+t+i* — *ašša+t+i* 「妻」(*RA* 77 1:36), *bāšī+t+i+ya* 「私の財産」(*RA* 77 2:14), *erše+t+i*  
「土地」(*Emar VI* 137:53)  
*+t+u* — *ašša+t+u* 「妻」(*Emar VI* 183:16<sup>1</sup>), *erše+t+u* 「土地」(*Emar VI* 14:22; 94:14,  
19; 137:58; *ASJ* 12 1:17, 20<sup>1</sup>), *sinniš+t+u* 「女」(*RA* 77 2:30)  
*+t+i+* — *erše+t+i+* 「土地」(*Emar VI* 159:15)  
*+i+* — *bēl+i+* 「主君」(*Emar VI* 17:8, 18), *ikrib+i+* 「願い」(*Emar VI* 42:13), *iptir+i*  
*+:+šunu* 「彼らの身代金」(*Emar VI* 256:21), *mīt+i+:+ya* 「私の先祖」(*Emar VI* 185:  
2<sup>1</sup>; *RA* 77 1:8; 2:11), *niš+i+:+šu* 「彼の民」(*Emar VI* 42:6)  
*+a:+t+i* — *aw+a:+t+i* 「言葉」(*Emar VI* 125:35), *bīt+a:+t+i* 「家」(*Emar VI* 8:39; 9:  
30, 33)  
*+a:+t+u* — *bīt+a:+t+u* 「家」(*Emar VI* 8:34; 139:35, 38).

目的語を修飾する形容詞や代名詞はほとんどの場合 CA の対格形態素で標示されているが、CA の主格形態素で標示してあるケースが 2 例ある。

*+a* — *anni+am* 「この」(*ASJ* 12 7:47), *dann+a* 「重い」(*ASJ* 12 7:9), *rabi+a* 「大きい」  
(*Emar VI* 156:1), *ḥabl+a* 「壊れた(?)」(*ASJ* 12 7:18), *qabur+a* 「墓(?)」(*Emar VI* 20:  
20).  
*+u* — *anni+um* 「この」(*ASJ* 12 7:35), *ḥabl+u* 「壊れた(?)」(*ASJ* 12 7:13).  
*+t+a* — *šanī+t+a+ma* 「ほかの」(*Emar VI* 185:22<sup>1</sup>; *RA* 77 2:30).  
*+a:+t+i* — *ann+a:+t+i* 「この」(*Emar VI* 8:34; 17:133<sup>1</sup>; 125:36).

## 5. エマルのアッカド語の格標示

以上の観察結果を要約すると表 2 のようになる。CA の格標示においては主格と主語、  
 属格と名詞・前置詞にかかる語、対格と目的語がそれぞれ一対一に対応するため、これ  
 を規範としてエマルのアッカド語の格標示を見ると、これに合わない例、すなわち名詞

	主語	名詞・前置詞にかかる語	目的語
CAの主格形態素	+	+	+
CAの属格形態素	-	+	+
CAの対格形態素	-	-	+

表2：エマルのアッカド語の格標示

と前置詞にかかる語および目的語を標示する主格形態素、目的語を標示する属格形態素は「間違った」格表示と見なさざるをえない。その場合、エマルのアッカド語の格標示は次のように記述できる。

- (1) 対格の用法は常に正しい。
- (2) 属格の用法はほとんど正しいが、まれに目的語を標示することがある。
- (3) 間違った格標示は主として主格に見られる。

(2) の属格と対格の混同は複数・双数においてこれら二つの格が区別されていないことに基づく類推と説明することが可能であろう。また (3) に関しては、活用しそこねた語が主格＝辞書形をとっていると考えることができる。

しかし、ここで Klein が『第二言語習得』と題する本の中で次のように書いているのに注目したい [注6]。

Any language variety, no matter how rudimentary, has, apart from some variable components, a certain intrinsic *systematicity*. Thus the function of any one word or construction within the given variety cannot be derived solely from the corresponding word or construction in the target language.

この見方に従い、CAの格標示の体系を前提としないで表2を見ると、別の分析が可能となる。

(1') CAの主格形態素はエマルのアッカド語では格を標示しない。

(2') CAの属格形態素は主語以外の統語要素を標示する。

(3') CAの対格形態素は目的語を標示する。

このような格標示の体系はCAのそれとは大きく異なるものの、理にかなったものでないとは言えない。まず、主格形態素が格を標示しないため(1')、格を標示する形態素が二つしかないことになるが、これは三つの格を標示するのに十分な数である[注5]。次に、属格と対格の区別が曖昧になっているが(2')、これらの二格の区別がCA自体でも余剰である[注7]ため、誤解の恐れのあるときには主語と非主語を確実に区別できる上記の格標示体系は申し分のない伝達機能を有するものであると言える。

それゆえ、エマルの書記が間違いだらけのアッカド語を書いていたと考える必要はない。彼らはCAの格標示体系を十分に機能し得る別の体系(1'~3')に再編成して運用していたと考えられるからである。

#### 【注】

\* アッカド語の表記は von Soden (1969) に従う。また、アッカド語ないしはテキストの行番号に [x]、'x'、x?、x! 等の記号が用いられている場合、それぞれ x が完全に破損している、部分的に破損している、疑いの余地がある、訂正されていることを示す。

- 1) エマルとその近郊から発見された文書については拙稿(1992)を参照。そのすべてがエマルで書かれたとは限らないが、エマルの王の名前が記してある文書は確実にエマルで書かれたものと考えることができるので、これらをエマルのアッカド語と定義する。ちなみに、エマル王家の系図も拙稿(1992)にまとめてある。なお、1992年以後に入手可能となったテキストは本稿のデータに含まれていないため、以下にあげるテキストが本稿のコーパスとなっている。RA 77 1 = Huehnergard 1983: 13-17; RA 77 2 = Huehnergard 1983:17-19; *Emar VI* 1 = Arnaud 1986:7-8; *Emar VI* 2 = Arnaud 1986:8-9; *Emar VI* 3 = Arnaud 1986:9-10; *Emar VI* 4 = Arnaud 1986:10-11;



*Emar VI 8* = Arnaud 1986:15-16; *Emar VI 9* = Arnaud 1986:16-17; *Emar VI 10* = Arnaud 1986:18-19; *Emar VI 11* = Arnaud 1986:19-20; *Emar VI 14* = Arnaud 1986:22-23; *Emar VI 17* = Arnaud 1986:26-28; *Emar VI 20* = Arnaud 1986:31-32; *Emar VI 42* = Arnaud 1986:57-58; *Emar VI 94* = Arnaud 1986:106-108; *Emar VI 95* = Arnaud 1986:108; *Emar VI 97* = Arnaud 1986:109-110; *Emar VI 125* = Arnaud 1986:133-134; *Emar VI 126* = Arnaud 1986:134-135; *Emar VI 137* = Arnaud 1986:143-146; *Emar VI 138* = Arnaud 1986:146-149; *Emar VI 139* = Arnaud 1986:149-151; *Emar VI 140* = Arnaud 1986:151-152; *Emar VI 141* = Arnaud 1986:153-154; *Emar VI 142* = Arnaud 1986:154-155; *Emar VI 144* = Arnaud 1986:156-158; *Emar VI 146* = Arnaud 1986:158-160; *Emar VI 147* = Arnaud 1986:160-162; *Emar VI 156* = Arnaud 1986:172-173; *Emar VI 157* = Arnaud 1986:173; *Emar VI 158* = Arnaud 1986:174-175; *Emar VI 159* = Arnaud 1986:175-176; *Emar VI 180* = Arnaud 1986:193-194; *Emar VI 183* = Arnaud 1986:196; *Emar VI 185* = Arnaud 1986:197-198; *Emar VI 253* = Arnaud 1986:149-150; *Emar VI 256* = Arnaud 1986:251-153; *AuOr 5 15* = Arnaud 1987:235-237; *JCS 40 2* = Beckman 1988:65-67 = Tsukimoto 199:185; *ASJ 10 D* = Tsukimoto 1989:163-165; *ASJ 12 1* = Tsukimoto 1990:177-180; *ASJ 12 7* = Tsukimoto 1990:189-193; *ASJ 12 8* = Tsukimoto 1990:193-194; *ASJ 12 10* = Tsukimoto 1990:197-198; *ASJ 12 16* = Tsukimoto 1990:208-210.

- 2) 第2～4節の例を見れば明かなように、この規則はエマルのアッカド語では部分的にしか当てはまらない。
- 3) フリ語を基層とするアッカド語では、CAの対格型格標示を基本としながらも、CAの動詞の主格人称接辞が目的語を対格人称接辞が主語を指し示す能格型の格標示が紛れ込む場合のあることが知られている（Gordon 1938:221やAdler 1976:105ff.を参照）。西セム語を母語とする書記は概ねCAのシステムに従っているが、CAの用法に合わない例も散見される（Huehnergard 1989:143-149やIzre'el 1991 I:178-185等を参照）。
- 4) 詳しくはvon Soden 1969:83を参照。
- 5) 格1と格2を標示する二つの形態素があれば、「無標性」が格3の弁別特徴となりうる。
- 6) Klein 1986:29。

- 7) CAでも単数以外では属格と対格を区別しない。これは、とりもなおさず属格と対格の区別がCAにおいて不可欠ではないことを意味する。

#### 【参考文献】

- Adler, H.-P. (1976) *Das Akkadische des Königs Tušratta von Mitanni*. Kevelaer: Verlag Butzon & Bercker.
- Arnaud, D. (1986) *Recherches au pays d'Aštata - Emar VI.3*. Paris: Éditions Recherche sur les Civilisations.
- Arnaud, D. (1987) "La Syrie du moyen-Euphrates sous le protectorat hittite: contrats de droit privé." *Aula Orientalis*, 5.
- Beckman, G. (1988) "Three Tablets from the Vicinity of Emar." *Journal of Cuneiform Studies*, 40.
- Gordon, C. H. (1938) "The Dialect of Nuzu Tablets." *Orientalia*, 7.
- Huehnergard, J. (1983) "Five Tablets from the Vicinity of Emar." *Revue d'assyriologie et d'archéologie orientale*, 77.
- Huehnergard, J. (1989) *The Akkadian of Ugarit*. Atlanta, Georgia: Scholars Press.
- Ikeda, J. (1992) "Linguistic Identification of an Emar scribe." *Orient*, 28.
- Izre'el, Sh. (1991) *Amurru Akkadian: A Linguistic Study*. Atlanta, Georgia: Scholars Press.
- Klein, W. *Second Language Acquisition*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Sigrist, M. (1982) "Miscellanea." *Journal of Cuneiform Studies*, 34.
- von Soden, W. (1969) *Grundriß der akkadischen Grammatik*. Roma: Pontificium Institutum Biblicum.
- Tsukimoto, A. (1988) "Sieben spätbronzezeitliche Urkunden aus Syrien." *Acta Sumerologica*, 10.
- Tsukimoto, A. (1990) "Akkadian Tablets in the Hirayama Collection (I)." *Acta Sumerologica*, 12.

## Case Marking in Emar Akkadian

Jun IKEDA

Akkadian was the lingua franca of the Near East in the second millennium B.C.E. Accordingly, it was learned and used not only in Mesopotamia proper (core Akkadian) but also by non-natives outside (peripheral Akkadian). Emar Akkadian is a variety of peripheral Akkadian used in ancient Emar (modern Meskene-Qadime) on the middle Euphrates.

Core Akkadian maintains a case system of the rigid accusative type. Thus in Akkadian the subject of both an intransitive and a transitive predicate is marked by the nominative morphemes, while the direct object of a transitive predicate is marked by the accusative morphemes. Besides, genitive morphemes mark adnominal syntactic functions such as the possessive.

Emar Akkadian attests a lot of anomalous examples of core Akkadian case endings. Our analysis has revealed that they are not haphazard mistakes. Emar scribes reorganized the core Akkadian case marking system into a new one, in which nominative morphemes are unmarked in case, genitive morphemes mark non-subject, and accusative morphemes mark the direct object.

池田 潤 (いけだ じゅん)  
テルアビブ大学大学院

(原稿受理日 1993年9月 3日)